

## パネル「豚の飼育過程」の解説

### 家畜の繁殖について

畜産でもっとも基本的で大切なことは、何でしょうか。

それは、どの畜種でも大切なことです。

答えは、家畜に健康でよい子をたくさん産んでもらうことです。畜産では、「繁殖」という言葉を使います。

繁殖は、家畜によって違いがあります。

それは1年中いつでも子を産むことができる動物と、季節によって子を産む動物がいるということです。

身近な家畜には、牛、豚、馬、ニワトリなどがいますが、繁殖のようすは動物によって異なります。

哺乳類の家畜の雌は、妊娠できる体の準備が整い、雄を受け入れられる状態とそれを雄に知らせる状態、これを「発情」と言いますが、この時だけ、雄を受け入れます。

牛や豚は、妊娠していない時は、1年中周期的に発情を繰り返します。つまり年中いつでも妊娠することが可能な家畜です。

一方、馬やヒツジ、ヤギは特定の季節だけに発情します。馬の妊娠期間は、約340日、ヒツジやヤギは約150日です。いずれも子が産まれる季節が春になるように、馬では春に、ヒツジやヤギは秋に繁殖期を迎えるようになっています。

少し見方を変えてみると、いつでも子どもを産める牛や豚は、畜産業に向いているとも言えるでしょう。

### 母豚になるために

養豚経営では、繁殖と肥育の技術が経営成果に大きく影響します。

健康で数多くの子豚を産んでくれる母豚の能力が大切であることは言うまでもありません。

子豚を初めて産む準備は、母豚になるための候補豚を育成しなければなりません。養豚経営では、この候補豚をすべて自分の農場以外から購入する場合と、一部のみ購入する場合に区分できます。

飼育の手間や品種の掛け合わせ、生産しようとする豚肉の質などを考え合わせて、いろいろな選択肢が考えられ、実行されています。

生後7ヶ月齢～8ヶ月齢になった候補豚に初めての種付けをするところから、繁殖豚の一生が始まります。

### 分娩と哺育

分娩が予定されている日の5日程前になると、母豚はふだん変われている豚房から分

娩房へ移動されます。

分娩房には分娩柵が設置されています。分娩柵とは、大きな母豚が子豚を踏みつけたりしないように工夫された柵です。

母豚の体重は、大きなものは 200kg を超えるので、子豚がまちがって下敷きになると圧死してしまう場合があるからです。

母豚からは 1 回当たり（1 腹当たり）10 頭前後の子豚が生まれます。生まれたときの体重は 2kg に満たない小さな豚です。

生まれるとすぐに母豚の乳を飲みます。分娩直後 5 日間ほどの乳には免疫成分も含まれており子豚にとって大切な乳です。

母豚の乳を飲んで育つほ乳期間は 20 日～25 日程度です。

子豚は、母豚から離乳されると子豚用に作られたミルク（粉状のエサ）のみで、飼育されるようになりますが、これに慣れるために、ほ乳中から餌付け用の飼料が与えられます。

#### 種付

子豚を離乳した母豚は、次の分娩のための種付けをします。

離乳後、1 週間から 10 日までに種付けできることが理想です。

ほ乳期間 25 日、種付けまでの日数 7 日、妊娠期間 114 日とすると、その合計日数は、146 日となり、 $365 \text{ 日} \div 146 \text{ 日}$  とすると 2.5 となります。

計算上は、1 年間に 2.5 回の分娩が可能ですが、母豚の健康状態や種付けの良否、さらには人間と同じように流産といった事故も発生することもあり、計算どおり効率よく飼育するには、日常のきめ細かな飼育管理が必要です。

養豚経営の母豚には、良質の肉がたくさん取れる豚を数多く産むことが求められます。このためにメスの系統（品種、血統、資質等）やオスの系統も重視しています。基本的には、子豚をたくさん産んで上手に育てる能力のあるメスに、良質の肉を生産する能力を期待できるオスを掛け合わせることが多くなっています。

#### 母豚の飼育

母豚は、上記の種付け 分娩 ほ乳 離乳・・・を繰り返します。

繁殖能力は、3 産～4 産目がピークでその後の繁殖能力は低下していきます。具体的には、1 回の分娩で産める子豚の数が減ったり、弱い子豚が生まれたり、乳の出具合が悪くなったりします。

経営主の判断や母豚自身の能力にもよりますが、繁殖能力が落ちてきた母豚は、6 産程度でとう汰されます。

#### 子豚・肉豚の飼育

離乳時の子豚の体重は、5kg～6kg 程度です。

まだ小さい豚ですが、それまで飼育されていた分娩房から子豚を飼育する豚房へ移動

されます。

子豚は母豚から切り離されたことや、飼育の場所が変わること、乳から飼料に食べ物が変わることなど飼育環境が大きく変わることが原因で、この時期にお腹をこわしたりカゼを引いたりするなど体調を崩す子豚も多く見られることから、この時期の飼育には大変な注意が必要です。

1 頭の豚が大きくなるまでに食べるエサの量はパネルに示したとおりです。(詳しくは飼料給与についてのパネルで)

エサは豚舎外部に設置された飼料タンクから、豚舎内に設置されたパイプを通してエサ箱に運ばれます。このことから豚舎内では、同じエサを食べる豚は同じ場所に集められて飼育されています。

発育に応じて食べる飼料の内容が変わるので、これに応じて、豚は別の豚房へ移動することになります。

肉豚は 190 日齢前後で 115kg 以上になった頃に出荷されます。

\* パネル内、文中の数値等は平均的なものであり、飼育方法等により異なります。